

戦國の政略結婚

高田 友

織田信長本能寺に斃れたる後、家臣連清須城に參集し、後繼を定めんとて會議を催す。このとき、秀吉、「三法師」なる三歳の嬰兒を抱きて上座に現れ、家臣皆平伏して、恰も秀吉を禮拜するが如し。豈圖らんや、この嬰兒、武田信玄の孫たりしとは。

各位には、あるいは異を立てたまふのことあるべし。さは、信長の孫にあらずやと。君、速斷したまふなかれ。それがし、「武田信玄の孫なり」とは申ししかども、斷じて「信長の孫にあらず」とは言ひたる覚えなし。「信玄の孫」なると、「信長の孫」なるとは、豈其の理必ず相抵觸すべけんや。そこもとに祖父の君御二方あらせたまふと同斷にて、信長は内祖父、信玄は外祖父。信玄、女、松姫、信長嫡男信忠に嫁して三法師を生みたるなり。信忠は信長とともに討ち死にしてあり。

君知らずや、戦國政略結婚の甚だしきを。諸大名はいづれもいづれも合從連衡に違なく、人質に出だすの心算にて、娘を嫁せしむるが、子生るれば我が孫といふに忽ちに仇と變ずる、人の世みな此の如くなるを彷彿とせしめずんばあらず。およそ戦國の武將、中原に鹿を追ふは、ことごとく我が子孫の繁昌を願ひてなり。然るに、出陣して敵と對峙するも、敵の領主は我が甥あるいは外孫なるの儀少なからず。然、則、此の戦ひに勝たば、我が男系子孫榮ゆべし。萬一敗れて割腹するの憂き目を見んとも、さは我が女系子孫（敵の男系子孫）の霸を唱ふるに至るべし。然而、勝つと負くると吾に於て何かあらんと諦觀に達するの武將なきに驚かるのみ。

就中、武田家の此が戰略を用ゐるを見よ。今川家滅亡したる後、當主氏眞、家康の庇護を待みて生を全うす。氏眞の父は桶狭間に討ち死にせし義元。而して、義元は信玄の妹を娶りて、氏眞出生の事あり。すなはち、氏眞は信玄の甥なり。

また、小田原北條氏滅亡の際の當主氏直、家康の女婿なるは広く知らるる所なれど、これが父は氏政。氏政は信玄の娘を娶りて氏直出生す。すなはち氏政と信忠は相婿、氏直と三法師は從兄弟なり。

さらに、今川と北條は已而姻戚の血濃厚なればこそ、氏眞と氏直と、此の如くに相似たる命名とはなりたりけれ。

扱、三法師は爾後如何なる人生を辿りし、興味津津たるものあらせられずや。秀吉は三法師を織田家後繼に据ゑ、これが庇護を名として、つひに天下を乗つ取る。三法師は岐阜城を與へられたれども、秀吉に臣從するを強ひられ、やがて其の偏諱を受けて秀信と名乗る。關ヶ原の戦ひのをりはいまだ纔に弱冠を踰えて年改まれるのみ。石田三成に加擔して岐阜城防衛に盡心竭力するあるも、池田輝政、福島正則など、豊臣恩顧の武將に攻められて降伏。福島正則の嘆願により誅殺を免れて高野山に入り、數年後に逝世す。信長の嫡孫と生まれたるに、臥龍天に昇ることなくして畢んぬるは、哀れを留めずんばあらず。

然は然りながら、岐阜城戦ひの砌、ただ一度のみとはいへども、風前の蠟燭の如くに瞬時輝きたる條ありき。今や落城との間際に、秀信机に向ひて、一心不亂に筆を動かしてあり。戦ひ終れば、家臣は落ち行くべし。いづれ、他の大名に召し抱へられんとするの儀あらん。かの貴公子は、今や命を全うすること難かるべしとの斷末魔に、家臣の行末を思ひて、推薦状をしたためてありしなり。

ああ、律儀なるかな。家臣の命を蚯蚓百足の如くに扱ひし暴戾の祖父信長は天下人となり、優渥の

人秀信は空しき人生を送りて、徒原あだしがはらむぐらの中うちに今生こんじやうじやくま寂莫しやうせいの鐘聲かねこゑを聞く。誰か知らざらん、さこそまさしく人の世の常なれとは。

なほ、此の人切支丹大名なりしを御記憶に留められよかし。

(令和元年二月二十七日受附)